電子メディアの可能性と宗教のゆくえ

石井研士

一　テクノロジーと文化変容

一九九一年に文部省科学研究費の重点領域研究として「高度情報化に伴う社会システムと人間行動の変容に関する研究」と題する、一〇〇名を超える研究者からなる大規模な共同研究が開始された。一九九二年には前年に行われたシンポジウム「文化変容の現在」の内容をもとにして『思想』（八一七号）誌上に特集「情報化と文化変容」が掲載された（この研究の成果は『情報社会の文化』全四巻（青木他編、一九九八―九九）にまとめられた。とくに宗教に関しては第四巻）。シンポジウム「文化変容の現在」のプログラム要旨の巻頭に、代表者として青木保が次のような一文を記している。「現代の情報化を、たんなる技術的問題と見るのではなく、またこれを経済・政治システムの問題としてのみ考えるのでもなく、まさにわれわれの日常的な文化の変容の問題、意味の領域の変容の問題として捉え……新しい研究のヴィジョンを展望していくことを目的としています。」（青木、一九九三）

当時はまだ「インターネット」や「マルチメディア」という用語や状況は存在していなかった。情報化社会の

到来を予告する『第三の波』の翻訳出版は一九八〇年のことで、一九八四年頃にマスコミを中心に「ニューメディア元年」という言葉が広まるといった状況であった。

この共同研究での共通認識は「情報化とは、とりあえず高度な情報通信・処理システムの普及にともなう現代社会の産業的、社会的、文化的変容として捉えておく」ことであった。技術革新が文化変容をもたらす、という命題は、研究対象や方法論が異なっても、共通の出発点であったということになる。筆者のメディアと宗教文化に関する基本的な立場を、マクルーハンの言葉を借りて表現すれば、「いかなるメディア(すなわち、われわれ自身の拡張したもののこと)の場合でも、それが個人および社会に及ぼす結果というものは、われわれ自身の個々の拡張(つまり、新しい技術のこと)によってわれわれの世界に導入される新しい尺度に起因する」ということになる(マクルーハン、一九八七、七頁)。新しいメディアは新しい人間環境・知覚慣習を生み出すのであり、とくに日本においては宗教文化にかなりの影響があったと考えている。さらに近年の青年における宗教現象や宗教的感覚を見ていると、メディアそのものが宗教的現実を構成しているのではないかとさえ思えることがある。

メディアと宗教の関係を考察する上で、留意しておかなければならない点がある。「影響」の問題である。現在のマス・コミュニケーション論では、効果研究の初期にいわれた強力効果説は有効視されていない。一九三八年に放送されたオーソン・ウェルズ出演のラジオドラマ『宇宙戦争』(H・G・ウェルズ原作)は、一二〇万人の人々をパニックに陥れた(キャントリル、一九八五)。あるいは「ヒトラーの政権獲得は拡声器とラジオの利用によって容易にされた」(イニス、一九八七、一一三頁)といった言動に代表されるマスメディアの直接的な影響力の大きさを論じた弾丸理論や皮下注射モデルは古典的研究となっている(田崎・児島編、一九九六)。現在は、マスメディアは限定的な効果しか持たないとする限定効果説の時代を経て新しい強力効果説の時代に入ったと指摘されたり、

カルチュラルスタディーズと総称される情報の受け手側の想像力や状況的要因を重要視する理論が提起されている。

現代日本の宗教状況を見たときに、メディアが構成する宗教的現実が、そのまま情報の受容者に強い影響を及ぼしたり、あるいは強烈なイメージを与えている、もしくは潜在的な宗教文化を喚起していると考えられる事例が存在する。たとえば、オウム真理教や法の華三法行に関する事件報道が日本人の宗教団体に対する評価に与えた影響は大きい。パナウェーブ研究所（千乃正法）に関する報道のあり方は、メディアの宗教団体に対する偏見を露呈しているが、それは日本人の偏見そのものでもある。超能力番組や心霊写真の特集、トイレの花子さんや現代の陰陽師を扱ったテレビ番組などが提供する素朴な霊魂観や祟り観は、若者たちには受容されやすいようだ。また、あまり意識されていないが、ニュース番組の中で一年間に三〇〇時間ほどの神社や寺院をはじめとした伝統宗教の行事の映像が流れている。潜在的な日本人の宗教的感性は、こうした映像情報に支えられていると考えることもできる。

情報化がもたらす宗教変容を考える際に、メディアの位置づけが必要となる。近年、短期間に急速な勢いでインターネットが普及したが、日本人にとって基幹的なメディアは、いぜんとしてテレビである。ここでの情報化におけるメディアは電波メディアとしてのラジオ、テレビから考えたい。

二　メディアと宗教の三つの関係

1　メディアと宗教

メディアと宗教を考えたときに、三つの関係を見出すことができる。第一は、きわめて一般的な意味で「メディア」と「宗教」の関係である。メディアと宗教を別個のものとして、両者の影響関係を考えるのである。

グーテンベルグによる印刷技術の革新は、宗教改革の中で大きな役割を果たした(アイゼンステイン、一九八七)。彼が印刷した四二行聖書はヨーロッパ最初の印刷本であった。ラジオという電波メディアにおいても、放送当初から宗教番組が放送されていた。アメリカではフラー神父(ラジオの草創期に人気を得た宗教者)の放送がルーズベルト大統領下の政治において大きな社会的影響力を持ったことがある(浜野、一九九一)。日本でもラジオ放送開始当初から講座番組として宗教番組が放送されていた。友松円諦(えんたい)の放送は好評を博し、具体的な宗教運動を興すまでになった。宗教団体は信者を獲得するためにさまざまな布教手段を用いているが、中には積極的にラジオやテレビ放送を行う教団、膨大な量のビデオテープを制作する団体も存在する。創価学会や阿含宗のように、通信衛星チャンネルのトランスポンダを所有し、独自の全国ネットワークを構築している教団も見られる。概して宗教団体は布教のため新しいメディアに対する関心が高く、多様なメディアを複層的に利用している。宗教の系統によって若干の相違は見られるものの、新しい宗教団体だけでなく、伝統教団でもこうした傾向は変わらない。

宗教団体が発信する宗教情報だけでなく、メディア自体が宗教現象を報道する場面も増加している。この点に関してはオウム真理教や法の華三法行、あるいはパナウェーブ研究所をめぐる集中報道や、バラエティ番組とし

て放送される心霊番組・超能力番組を考えてみれば明らかである。

2　宗教としてのメディア

メディアの特性を説明する際に、しばしば宗教的なメタファーが利用される。ラジオは、人類が手にした最初の電波メディアであり、それ以前の情報環境を大きく変化させることになった。マクルーハンは、ラジオの音を部族の角笛や太鼓になぞらえている。マクルーハンによれば、活字メディアの普及は、民衆の生活に深く息づいていた声の文化を押しつぶしたのであり、世界を均質化し統一された世界へと変容させた。ラジオは奥深い古代の力であり、はるかな遠い過去、久しく忘れていた太古の経験を現在に結びつける時間の絆である。均質化された経験は再び複雑な感覚複合として甦るのだという。「部族の角笛や古代の太鼓が反響し合う世界」はラジオ・メディアの特質であり、人の心と社会を一つの共鳴室に変えてしまう。マクルーハンは、オーソン・ウェルズの『宇宙戦争』やヒトラーのラジオの政治的利用に言及して、ラジオの持つ聴覚イメージが全体包括的及び全面関与的規模を持つことを証明したと述べている〔マクルーハン、一九八七、三〇八―三一九頁〕。「ラジオは他のメディアと同様、隠れ蓑をつけている。うわべは、個人対個人でじかに向かい合っているような、親密で私的な態度を装ってわれわれに近づいてくるが、究極的な事実としては、遥か過去の忘れられた心の琴線に触れる魔術的な力をもつ識閾下の反響室なのだ。」〔同三一三頁〕

メディアに関する異なった表現、評価もある。思想家のマックス・ピカートはラジオに言及し、「ラジオは、純然たる騒音語を製造するための機械装置である。そこでは内容はほとんど問題ではなく、一つの騒音が生ずるということだけが問題なのだ。言葉はラジオのなかで搗き砕かれているようにみえる。言葉は、いわば無様な堆

積に変えられている」。ピカートによれば、ラジオをはじめとした現代テクノロジーは、生の充実した状態としての沈黙を壊す元凶である。声は複製され、生の現場から離脱し場所と方向性を失ってしまう。「ラジオの騒音は人間を破壊する」のである(ピカート、一九六四、二三二・二三四頁)。

ラジオに対するマクルーハンとピカートの認識が大きく異なっているにもかかわらず、ラジオの多様な内容にはいっこうに興味が示されない点は興味深い。ピカートにとってラジオの内容は複製された騒音に過ぎず、「ラジオの騒音の中では、真理、誠実、愛、信仰のようなあらゆる根源的現象も存在することは出来ない」(同二四三頁)。「メディアはメッセージ」と述べたマクルーハンにとって、内容は形式以上に意味あるものではなかった。それでは、熱心なカトリックであったマクルーハンは、メディアという形式の中を流れるフラー神父やカフリン牧師の声に何の意味も見出さなかったのか。八〇万人の聴取者が聞くNHKの「ラジオ深夜便」で流れる「こころの時代」は単なる騒音に過ぎないのだろうか。

インターネットを宗教的と形容する研究者は少なくない。情報工学・情報文化論を専門とする西垣通は『聖なるヴァーチャル・リアリティ』の中に「コンピューター神」という一節を設けて、コンピューターが「神」でもあるかのように説明している(西垣、一九九五、一一二―一一六頁)、科学技術の進歩を象徴するコンピューターの周りには一種の祭壇を思わせるような雰囲気が漂っており、一般の人々は畏敬のまなざしを注いだ。コンピューター神は一種のもの言わぬ汎神と化し、コンピューターからの出力は、一種の「神託」のようにうやうやしく受け取られた。ヴァーチャルリアリティはいわば「科学技術の精華を用いて擬似的な神殿」をつくるのである、と。

高度情報化社会が宗教用語によって理解できるとすれば、こうしたレトリックは宗教学者にとってはきわめて

興味深いものだ。ウェーバーのいう脱呪術化とは異なった社会の聖化のプロセスを予想できるし、宗教学の研究対象は社会全体へ広がり、その分析は重みを持つことになる。

常識的には「宗教」とは異なったものを類比によって説明しようとする試みはこれまでにもしばしば行われてきた。宗教学者の柳川啓一は、SF仕立てで東京大学の安田講堂を「神殿」、林総長を樹木の神格化とすることで、大学の非合理的側面を解釈して見せた（柳川、一九七七）。こうしたメタファーは対象の深層の本質を把握するために有効である。

3　宗教というメディア

一九七〇年代以降の宗教現象を見ていると、救済や信仰といった宗教そのものを求めているというよりは、他のものでも代替しうるものとして宗教がたまたま選択されたと考えられることがある。小・中・高校生八九一人に対する子どもたちの超能力や霊の存在など非合理的な現象に関する「非合理志向アンケート調査」の結果によると、学業や将来、友人や親子関係に悩みを持っている「自信なしグループ」の子どもたちには、「自信ありグループ」と比較して「ゆうれいがいる」「占いをよくやる」「占いで行動を決める」などに高い関心を示していることが明らかになった。調査を行った汐見稔幸は、「より大きな現実から逃避的になる傾向を助長し、非合理の世界への関心を強める要因になっている可能性がある」と指摘している（汐見、一九八八）。まず最初に現実逃避があり、逃避先のひとつとして非合理的なものへの関心があったということになる。

現在の癒しやヒーリング・ブーム、あるいは一九七〇年代の宗教ブームやオカルトブームといわれたものが、実際には癒しや救済そのものを目的としているのではなく、たんなる媒体（メディア）であったように思えるので

ある。恋愛依存、ドラッグの服用、過食・拒食、バンドの追っかけなど、自分探しの過程の中で次々に対象は変わっていく。ある時にはオカルトやヒーリングや占いに関心が向いただけで、別の時にはリストカットで生きていることを確認しようとする若者が存在する。

宗教とメディアをめぐる三つの関係は、それぞれが独立したというよりは相互に関連しながら複雑さの度合いを増している。高度情報化社会は明らかに、宗教をめぐる言説・映像が情報空間において、かつてより多く流通している時代であって、高度情報化社会の中で自律的にコミュニケーションを行う行為とそのための技術であるメディア・リテラシーと同様に、宗教に関する情報の真偽と態度のとり方を決定する技術としてのリリジョン・リテラシーが考慮されなければならない状況を迎えつつある。

三　電波メディアと電子メディア

高度情報化社会における宗教とメディアの関係を考察しようとすると、どうしても電波メディアにおける状況を理解する必要が生じてくる。安田寿明は「電子テクノロジーと文化変容」の冒頭で「文化変容に最大のインパクトをもたらした電子的媒体はラジオとテレビ放送である」と述べている〔安田、一九九二、六頁〕。ラジオとテレビにさかのぼって分析を始めることとしたい。

(1) ラジオ

一九二五年三月一日、社団法人東京放送局によって日本における初めてのラジオの試験放送が実施された。同年三月二二日には仮放送が、海軍軍楽隊の演奏によるマリタナの幻想曲で幕を開けている。放送局は開設当初か

ら教養番組としての講演や講座番組にかなりの力を注いだ。講座番組が開始されたのは仮放送開始後二カ月で、本放送開始以前のことであった。そのトップとして放送されたのが日曜日の朝一〇時から三〇分間の「宗教講座」であった。第一回放送のタイトルは「親鸞経の文化的意義」で講師は西本願寺の第二二代の門主大谷光瑞の弟大谷尊由であった。

その後ラジオの宗教番組は順調に増加していった。ここでいう「宗教番組」とは、(1)宗教団体もしくは宗教と関連する団体が提供する番組で、(2)放送内容に何らかの宗教的なメッセージを含んでいる番組を意味している。つまり宗教団体が提供する番組であっても、一般的な音楽番組やトーク番組であって内容が(2)にあたらないものは含まれない。

ラジオ放送はメディア・ヒーローを生み出した。友松円諦が担当した「聖典講義」が大人気を博した。一九三四年三月一日に東京放送局から「聖典講義」が放送された。『ラジオ年鑑 昭和一〇年版』の特集「宗教放送」には「聖典講義は昭和九年の放送史を飾る一大収穫である。その成功はラジオの教養プログラムに新紀元を画したのみならず、ラジオの価値を高からしめ、またその放送記録の出版は洛陽の紙価を高からしめている」と最大級の賛辞が記され、ラジオ史上に残る著名な宗教番組となった。友松は高聴取率を背景に全日本真理運動を創設し全国に一〇〇〇の支部ができたという(日本放送協会編、一九八九、一二四頁)。

戦時中に一時宗教番組は中断するが、一九四六年一月二〇日、「宗教の時間」として再開された。さらに一九五一年に民間放送局が開局するに伴い、多くの教団が次々に番組を放送するようになった。相次ぐ民放の開局は、信教の自由によって活動の制度的基盤を獲得した宗教団体に大きな活動の場を与えることになった。早くも一九五一年には金光教、天理教、キリスト教系の宗教団体、一九五三年には孝道教団、一九五四年には東本願寺、西

本願寺、曹洞宗が番組を開始している。そして一九六〇年頃には「宗教放送ブーム」と言われるまでになるのである。

一九六〇年以降、メディアの主役はラジオからテレビへと移行する。ラジオはテレビの普及とともに影響力を失っていったが、その後音楽番組やトーク番組に特化する形で現在まで重要なメディアとして存続している。これまでに実施された調査結果を比較するとラジオにおける宗教放送の時間は増加していることがわかる。一週間の全放送時間は、一九六〇年が三五〇〇分、一九八五年が四八七三分、二〇〇二年が五四四四分で、二〇〇二年は一九六〇年の一・五倍に増加したことになる。もっとも、ラジオの放送時間全体も増加しているので、一概に「増加」とはいえないが、それでも多くのラジオ局からかなりの宗教番組が放送されていることは確かである(ここで利用した資料は、「宗教放送の実情」(『宗教年鑑 昭和三五年版』文部省、一九六一年)、「テレビ、ラジオでいま見聞できる全国全局の宗教全調査でわかったこと」(『月刊住職』四月号、一九八五年)と「テレビ、ラジオでいま見聞できる全国全局の宗教番組全プログラムパート2」(同五月号)、そして筆者が二〇〇二年に実施した調査である)。

しかしながら順調かつ単純に宗教放送の時間が増加したわけではない。個々の放送局の一週間の放送時間の変化を見ていくと、放送時間が増加し、二〇〇二年現在一週間に合計で一二〇分を超える宗教放送を行っているのは、地方局に多く、キー局、もしくは準キー局では放送時間の減少が顕著である。つまり、ラジオ・ネットワークの中心に位置する放送局が宗教番組の放送時間を減少させているのである。

また、番組を提供している教団数は、放送時間数の増大とは裏腹に減少している。これは特定の教団が各地の地方局で放送を行うようになったためである。放送時間帯は番組の九六パーセントが朝八時半までの放送となっており、特定の時間帯に限定されている。

ラジオでの宗教放送の現状であるが、二点を指摘しておきたい。ひとつは、ラジオでの宗教放送開始当初から依然として続く「宗教くさくない宗教番組」に対するニーズの存在である。宗教団体の提供するラジオでの宗教放送が、聴取という点では苦戦を強いられている一方で、心の交流を生み出すＮＨＫ「ラジオ深夜便」のような番組は多くの聴取者を獲得し、不安や孤独感を癒しているという（「朝日新聞」一九九六年九月二二日）。「ラジオ深夜便」は一九九〇年に始まり、翌年現在のような午後一一時一〇分から午前五時までの放送となった。番組は予想以上に年壁者の人気を集め、最高聴取率は〇・八パーセント、全国で約一〇〇万人が聞いているという。放送内容は、日本列島くらしのたより、全国の天気、ワールドネットワーク、深夜便小劇場、ロマンチックコンサート、にっぽんの歌こころの歌などが、聴取者からの便りを挟んで続く。そして番組の最後に一時間、テレビで放送された宗教番組「こころの時代」が音声のみで流されるのである。

この「ラジオ深夜便」では、ラジオ放送を通じて聴取者の具体的な接触が生じる。ＮＨＫは番組の収録とリスナーとの交流の場として「ラジオ深夜便のつどい」を全国各地で開催している。このつどいは常にお年寄りでいっぱいになるのだという。新聞記事によれば、つどいには若者の姿も見られるようになったという。友松円諦が始めた全日本真理運動と通底する何ものかが「ラジオ深夜便」にも潜んでいる。

今一点注目したいのは、すでに放送を終えた番組が、インターネットの普及という悄報環境の変化の中で、再生されている点である。天理教では、ホームページのラジオとテレビの放送ガイドに一覧が表示されていて、過去に教団が放送した番組をインターネットラジオとして聞くことができるようになっている。放送は一過性でなくなった。このようなインターネットラジオを開設している宗教団体はカトリックや天理教など少なくない。メディア環境が変化する中で、ラジオという独立したメディアの放送内容が再利用される可能性が生まれている

（ラジオにおける宗教放送に関しては〔石井、二〇〇三〕を参照）。

(2) テレビ

一九五三年にテレビ放送が開始されて以来五〇年が経過したが、テレビが私たちの生活に与えた影響の大きさは、専門家の言葉を借りなくても実感として理解することができる。「テレビのない生活」は考えられない、というのが大方の日本人の本音であろう。インターネットが普及しつつある現在も、この状況は変わらない。

二〇〇一年にNHK放送文化研究所が実施した「IT時代の生活時間」調査によると、パソコン、携帯電話、インターネットと、ラジオ、活字（新聞、雑誌、マンガ、本）、CD、テープ、ビデオなどと比較して、テレビが利用者率、時間量ともに群を抜いて多い〔NHK放送文化研究所編、二〇〇二〕。内閣府が二〇〇二年に実施した「第四回情報化社会と青少年に関する調査」においても、一日平均のテレビ視聴時間は二―三時間という人が過半数を占め、青少年にとって相変わらずテレビは接触時間が長い基幹的なメディアであると指摘されている。

ラジオとテレビにおける宗教放送を比較した場合に、いくつか興味深い点が存在することに気づく。たとえば、ラジオでは、戦後民間放送が次々と開局されることによって宗教番組・時間が増加する。一方テレビでは、教団提供の宗教番組はきわめて少なく、視聴率も低い。他方で、テレビはラジオでの宗教番組と異なった三番目のタイプの宗教放送を産み出した。つまり、バラエティ番組としての超能力の存在を前提とした番組や心霊写真特集に代表される番組である。こうした番組はラジオでは生じることがなかった。テレビという視覚メディアはある種の宗教現象にきわめて親和的であるといわざるをえない。

ラジオでの二つの宗教放送の分類を踏まえて改めてテレビで放送される宗教関連番組を分類すると四種類となる。第一は教団提供の宗教番組である。一九六〇年頃のラジオでの宗教ブームから、テレビでもブームが起こる

のではないかと期待されたが、今日までそうした事態は生じていない。一九八〇年代にUHF局を中心にキリスト教系の番組が多かったが、現在はほとんど放送されていない。仏教関係では「比叡の光」がよく知られているが、数年前に東京エリアでの放送は終わってしまった。また、日本テレビで開局以来放送されていた「宗教の時間」も局側からの一方的な通告のもとに放送が中止されている。テレビでの教団放送は、ラジオと異なり明らかにうまくいかなかったのである。ラジオとテレビというメディアの違いとともに、放送時間がもっぱら土曜日と日曜日の早朝もしくは深夜に限定されたことも視聴率が低迷する一因となった。

昭和三〇年代からのテレビ文化の中で、宗教団体はどのような番組を放送したらいいか苦慮してきた。宗教番組には放送上いくつかの制約が設けられている。現在の日本民間放送連盟の番組基準では「七章　宗教」として四項目が設けられている。信教の自由および各宗派の立場を尊重し、他宗・他派を中傷、誹謗する言動は取り扱わない。宗教の儀式を取り扱う場合、またその形式を用いる場合は、尊厳を傷つけないように注意する。宗教を取り上げる際は、客観的事実を無視したり、科学を否定する内容にならないよう留意する。特定宗教のための寄付の募集などは取り扱わない、となっている。当然のことながら、特定の教団や宗派の一方的な宣伝や予言の告知や治病儀礼を含む放送は許可されない。

こうした制約の中で、教団はさまざまな経験を重ね、放送の困難さを実感することになった。宗教と名がつくとなかなか見てもらえない、説教調で話すと聴衆が離れていく。一九六〇年と一九八五年と比較すると、放送を行っている教団数や番組数、放送時間などに大きな変化は見られない。この二五年間に放送局も放送時間も急速に増加したわけであるから、逆に宗教番組の影響力は相対的に減ったということができる。テレビ放送を中止する教団も少なくない。一九八七年に文化庁宗務課が行った調査によると、かつてテレビ放映を行ったことがある

四〇教団のうち、現在も番組を放映している教団はわずかに九教団にすぎない(『宗務時報』七七、一九八七年)。

第二は、NHKの「こころの時代」に代表されるような教養番組としての宗教番組である。「こころの時代」の番組内容を宗教系統別にみると、圧倒的に仏教関係の多いことがわかる。年間番組のおおよそ九割は仏教である。その他にキリスト教関係の文化人が出演したり、ごくまれに神道の祭りが放送されている。新しい宗教団体の宗教指導者が出演したり、話題として取り上げられることは皆無である。「こころの時代」以外でもNHKで放送される宗教関連番組の大半は仏教である。この点ではNHKは仏教の普及に寄与しているかもしれない。民放でも宗教関連の教養番組がないわけではないが、ごくわずかである。

第三は、バラエティ番組としての宗教番組である。教団提供番組の不振とは対照的に、多くの日本人が「見る」宗教番組が現れるようになった。一九七四年三月七日、日本テレビから「木曜スペシャル――驚異の超能力! 世紀の念力男ユリ・ゲラーが奇跡を起こす!」が放送された。その後の超能力ブームのきっかけになったといわれる番組で、三〇パーセントという視聴率は、日本人の関心の高さと番組の成功を示すものであった。以後民放局は手を代え品を代えこの種の番組を作り続け、次々と新しいメディア・ヒーローを生みだした。宜保愛子の霊視、前田和慧や織田無道の霊能力、ノストラダムスの大予言、ネッシーやツチノコ等の未確認生物、UFO、ミステリー・サークル、チャネリング、Mr.マリックのハンドパワー、都市伝説、心霊写真、リングシリーズなどのジャパニーズ・ホラー、最近は現代の陰陽師、超能力捜査官、そしてスピリチュアル・カウンセラーといった具合である。

テレビ局はこうした番組を次々と送り出す一方で、消費し、廃棄してきた。我々視聴者もそう望んできた、ということだろう。

そして最後はニュース報道で、季節の行事や祭りの放送と宗教に関わる事件報道が行われている。宗教に関する事件は、ワイドショーを含めて集中報道される傾向が見られる。一九八〇年に起こったイエスの方舟事件をはじめとして、和歌山県での真理の友教会の神の花嫁集団焼身自殺事件、統一教会の集団結婚式・霊感商法、オウム真理教事件、明覚寺の霊視商法事件、法の華三法行の詐欺事件、ライフスペースのミイラ事件、メディアは次々と事件を大写しにして見せた。二〇〇三年四月末から一ヵ月にわたる白装束集団（パナウェーブ研究所）に関する集中報道はまだ記憶に新しい。

宗教の情報化に関して興味深い点は、現代社会において衰退が指摘される伝統宗教に関する情報が、かなりの程度流通している点が興味深い（石井、一九九九・二〇〇二）。テレビで流れている宗教関係の番組は、溢れんばかりの宗教に関する事件報道、超能力や心霊写真のバラエティ番組、そして数少なく視聴率の低い宗教団体の番組だけではない。メディアは、我々に実生活からは消えつつある伝統行事を再生して見せるのである。季節の折々の行事をはじめ、適切な時期に全国からさまざまなお祭りや珍しい行事がお茶の間に届けられる。一年間のニュースの中で放送される祭りや宗教行事の映像は、二一世紀になった現在でも六〇〇時間を超えている。私たちの生活が自然のリズムから切り離されがちになり、高度情報化社会や高度大衆消費社会のなかで営まれるようになったときに、私たちはテレビを通して移りゆく季節を目にすることになる。こうした放送は、一部の日本人の伝統文化への関心や伝統的な宗教性を喚起する。

宗教をめぐる報道のあり方も重大な問題であるが、私が関心を持って見ているのは、バラエティ番組として放送される宗教番組である。近年、霊の存在を前提とした番組が増加している。一九九五年のオウム真理教による地下鉄サリン事件以降、一時姿を消していたバラエティ番組としての宗教番組が増えているのである。

こうした番組の影響は、思いがけず大きなものだった。一九九三年とその翌年に講義を受講している学生六五二人に対して心霊写真特集などの番組を見るか、どう思うかについてアンケートを行ったところ、六割が「見たことがある」と回答した。チャンネルをかえていてたまたま見ることになった学生が多い。「怖いから見ないようにしている」という回答が二割ほどあった。「テレビに出てくる心霊写真は本物」が五割を超えた。アンケートの結果によれば、テレビで放送された内容に対する信頼度はひじょうに高い。

民放連や放送局の番組基準に照らし合わせると、こうした心霊写真の特集や霊能力を売り物にした番組は放送することができない。放送基準には、迷信は肯定的に取り扱わない、占い、運勢判断およびこれに類するものは、断定したり、無理に信じさせたりするような取り扱いはしないという項目があるが、実際には無視された格好になっている。

しかしながら、各局で設けている放送倫理委員会や民放連の放送倫理・番組向上機構において、こうした宗教番組のあり方が議題として取り上げられたことがない。性や暴力に関する検討は繰り返し行われているものの、宗教に関しては野放し状態ということになる。宗教に寛容な日本人といってしまえばそれまでだが、事態はそう簡単ではない。オウム真理教事件の後、テレビで放送された霊能者やオカルトに関する番組が影響したという指摘があった。直接的な影響の有無は断定できないが、伝統的な宗教的慣習が日常生活の中から脱落している現在、素朴な霊魂観や来世観、終末観がメディアを通じて流通し、影響力を有していることの意味は十分に検討されなければならない。

ラジオ、テレビとインターネットを比較したときに、利用の仕方で決定的な相違が存在する。それはラジオ、テレビにおける「番組視聴の偶発性」である。インターネットの場合には、偶然に宗教団体が運営するホームペ

ージにアクセスする可能性は低い。あくまで意図的に特定のホームページを見るのであって、たまたま宗教関連のホームページにあたり、そのまま見るということは少ないだろう。ラジオ、テレビ、とくにテレビではチャンネルをかえる際に、見るつもりのなかった番組を偶発的に視聴することがある。テレビ局側は、そうした視聴者を獲得するためのさまざまな仕掛けをほどこしている。とくに超能力番組や心霊番組は最たるものの一つである。

(3) コンピューター

宗教界におけるコンピューター利用は、日本社会全般へのコンピューターの浸透に合わせるように、あるいはやや遅れて始まった。コンピューター利用を否定する積極的な宗教的理由はどの教団にも存在しなかった。宗教界へのコンピューターの浸透はまず事務(寺務・社務)からであった。企業がコンピューターを従業員の給与や管理のために用い始めたように、教団においても給与等の計算や文書作成のために導入され、宗教団体のニーズに合わせて「お寺の大黒柱」や「寺院会計らくらく」といった専用ソフトが開発されていった。その後信者管理の活用へと進み、専用ソフトが開発された。檀家管理や納骨管理、さらには過去帳を入力してデータベース化し、事務を軽減するとともに、ダイレクトメールによる各種催事への案内を出すことによって、死者を媒介せずに直接「生者」へサービスしようとする試みも始められた。

新宗教の大教団の中には、パソコンが普及する以前から、大型コンピューターを導入して信者管理をする教団もあった。なかには教団本部内でＬＡＮを構築した生長の家や、心の状態と病状との関係をコンピューターによって分析しているＰＬ教団のような事例も見られる。

一九八〇年代後半になりコンピューター通信が広まるにつれて、独自のネットワークを構築する教団が現れた。全国八万余の神社を包括する神社本庁では、一九八九年から三カ年計画で、神社本庁にホストコンピューターを

設置した上で、包括する全神社にパソコンを導入し、電話で回線をつないだネットワークを構築することを決定した。また、神社本庁自体を情報センター化する構想の第一歩として、図書管理及び閲覧業務におけるコンピューター利用が進行しつつあり、最終的には神社界全体のデータベースの構築が考えられた。神社本庁が、コンピューター利用に関して明確な目標を設定したことは、宗教団体が高度情報化社会にどのような対応を選択するかを考察する上できわめて大きな意味を持っている。

浄土真宗本願寺派では、他宗派に一歩先んじて、一九八九年五月二一日より、パソコンや通信機能を備えたワープロによる相互通信ネットワークシステム「真宗ネット」を開局した。京都市下京区の本山宗務所を初め、各末寺においてもパソコン利用が進んできたために、これまでのファクシミリ通信を一歩進めて、オンラインでパソコンやワープロを結び、より迅速で正確な情報通信、コンピューター世代の青少年の教化活動、僧侶間の横のつながりの形成を目的として開局されたものである。通信サービスは、宗門の情報提供と各種設定したテーマをめぐる意見交換の場としての電子掲示板、歎異抄や聖典注釈版が収納された資料保管庫、電子郵便、電子世間話の四つであった。ホストコンピューターに登録して初めて会員となるが、会員以外でもゲストとしてサービスが受けられる。入会金は無料で、通信は二四時間稼働した。一周年を迎えた時点で会員は二八六人を数え、毎月の通信回数も平均一四〇〇件と順調な滑り出しを見せた。

浄土宗では一九八八年からコンピューターを使った浄土宗総合情報システムの構築を開始し、僧籍台帳や功績の評価、宗費の告知などの利用をはじめ、九二年度をめどにVANを使った事務のコンピューター化計画を発表した。アメリカでは日本よりも早く、長老教会のプレスビネットを初めとしていくつかの教団がネットワークを構築しており、しだいに日本においても普及の傾向を見せたのであった。

こうした試みの上に、九〇年代半ばからのインターネットの普及が存在するのである。宗教団体は、紙媒体をはじめとして、ラジオ、テレビ、ビデオ、CATV、通信衛星など多様なメディアでの布教の歴史を有している。そして我々日本人は、教団の提供する宗教情報だけでなく、メディアを流れる多様な宗教情報にも経験を積んできたといっていい。インターネットは出現したのではなく、他のメディアによって構築された宗教とメディアの環境の中に立ち現れたのであった。

四　電子メディアは新しい神学を生み出すか

ヨハネ・パウロⅡ世は二〇〇二年「世界広報の日」に「インターネット――福音宣教の新たな場・フォーラム」というメッセージを発信した。

インターネットによりもたらされたこの仮想空間は、新千年期の初めに開かれた新境地です。過去にあった数々の新境地と同様に、このサイバースペースも、危険と有望性を併せ持っています。

そしてまた、他の大きな変革期を特徴づけていた冒険性をも伴っているのです。教会にとって、サイバースペースの新世界は、福音のメッセージをのべ伝えるために、その持ちうる力を発揮して挑戦すべき大冒険への召し出しともいえるものです。この挑戦は、この千年期の初めに、主の「沖に漕ぎ出しなさい(Duc in altum!)」(「ルカ」5・4)というご命令に従うことの意味の中心に位置しているのです。

……勇気をもってこの新しい敷居を越えてください。それは、ネットの世界に深く踏み込み、今こそ、過去と同じように、福音と文化の偉大な結合が、「キリストのみ顔に輝く神の栄光」(「Ⅱコリント」4・6)を世

に示すためです。こうした目的のために働くすべての人を主が祝福してくださいますように。（二〇〇二年一月二四日、カトリック中央協議会広報部訳）

一九七〇年代にアメリカで盛んになったテレヴァンジェリスト（テレビ伝道師）は、コンピューターと通信衛星、CATVを結びつけることで短時間に多くの信者（視聴者）と資金を獲得した。彼らはたった一カ所の教会（ここは同時にスタジオでもある）から多くの視聴者に呼びかけることで、信仰のみならず政治にまで影響力を持ったのであった。

テレヴァンジェリストがテレビ画面で頻繁に訴えるふたつのイメージがある。ひとつは、緊急で差し迫った破壊的なイメージである。今すぐ行動に移さなければ、飢えに苦しむ多くの人々を救うことができないとか、今すぐ献金を送らなければ来週からの放送はできなくなるなど、緊急かつ破壊的なイメージが強烈に訴えかけられる。いまひとつは神の祝福が視聴者に降り注ぐというイメージである。あなたが神に何か（献金）を与えたならば、あなたは神から数倍の祝福を受けるだろうというもので、研究者の中にはこうした神学は免罪符の現代的回帰だと指摘する者もいる（Horsfield, 1984）。

目下の高度情報化社会を担うメディアとしてのインターネットに限定していえば、宗教団体の開設するウェブサイトは必ずしも順調な普及とはいかない一方で、占いを中心とした宗教団体を母胎としない半ばエンターテイメントとしての宗教情報は増大しつつある。

表1に示すように、田村貴紀が二〇〇二年に実施した二五歳から四四歳までのインターネット利用者に対する

表1　アクセスしたことのあるホームページ（複数回答：%）

占い	59.8
人生相談	6.2
カウンセリング	6.0
宗教一般	10.0
癒し・ヒーリング系	13.0
相互扶助・セルフヘルプ	3.3
個人の日記	45.3
自分の選挙区の国会議員	7.4
政党に関する	18.3
著名な政治家	14.2
どれもない	24.4

アンケート調査では「宗教一般」「癒し・ヒーリング」へのアクセスはわずかである。他方で「占い」に対する関心は高い。これはこの世代の宗教に対する関心がそのまま表れたものであって、インターネットというメディアによって増幅されたり、新たなマーケットが生まれたとは考えにくい(田村、二〇〇三)。

宗教関係のホームページ数から見ても、活発な利用といえるような状況にはない。YAHOO! JAPANの「生活と文化」カテゴリーの宗教に分類されている系統別のホームページ数と宗教法人数を比較すると、おおよそ現状を理解することができる(表2。YAHOO! JAPANは二〇〇四年三月一九日、『宗教年鑑』は二〇〇三年版を利用した)。神道も、専任宮司のいる本務社に限定すれば割合は上がることになるが、それでもまだごく一部にとどまっている。仏教系も同様に、専任の住職をもたない過疎地の兼務寺院を除けば割合は増加するが、状況は神道と大差ない。キリスト教系は教会数に比べて開設率が高くなっている。これはキリスト教の布教方針と関係している部分が大きく、ラジオ・テレビでもキリスト教系の番組が多かったことと理由は同一である。

表2　宗教法人の開設しているホームページ

	YAHOO上の開設数	宗教法人数	開設率(%)
神道系	282	85099	0.3
仏教系	959	77492	1.2
キリスト教系	839	4337	19.3
その他	167	15349	1.1

インターネットを含めた情報環境は急激に変化しているために、目下の判断が五年先にどれだけ有効であるかわからない。コンピューターが電話やテレビと同じように容易に操作できるようになったときに、少なくとも宗教団体も同様にそうしたメディアを利用することになるだろう。

私は目下のところ、宗教団体によるインターネット利用や、インターネットで流通する宗教情報が日本人の宗教性を大きく変容させているとは考えていない。しかしながら

ラジオ、テレビ、ビデオ、CATV、衛星放送といった多様なメディアの登場と我々日本人の生活への浸透、そこでの宗教情報の質と量を考えたときに、日本人の宗教性に地殻変動が生じてもおかしくないと考えている。地縁や血縁を契機とした伝統宗教が希薄化し、宗教団体に対する忌避感が増大する中で、メディアは宗教に関する新しい制度的基盤として確立しつつある。それぞれのメディアが宗教に関する新しい知覚慣習を生み出してきたとすれば、今起こりつつある加速度的なメディア環境の変化は、そう遠くない将来、これまでとは異なった宗教的感覚や宗教体験、そして神学を生み出してもおかしくはない。すでにその萌芽はインターネットでの多様な試みのどれかに予告されているのかもしれない。我々の宗教的リアリティはメディアによって支えられる比重を増している。メディア環境がいっそう複雑化し多様化するにつれて、変化をよぎなくされるにちがいない。

引用・参考文献

アイゼンステイン、エリザベス、一九八七年『印刷革命』別宮貞徳監訳、みすず書房。

背木保、一九九三年「重点領域研究「情報化社会と人間」第5群 平成三年度シンポジュウム「文化変容の現在」プログラム報告要旨」『東京大学社会情報研究所紀要』四六。

背木保他編、一九九八―九九年『情報社会の文化』1―4、東京大学出版会。

雨宮処凛、二〇〇〇年『生き地獄天国』太田出版。

イニス、ハロルド、一九八七年『メディアの文明史――コミュニケーションの傾向性とその循環』久保秀幹訳、新曜社。

石井研士、一九九二年「情報化と宗教」井門富二夫編『アメリカの宗教』弘文堂。

――、一九九九年「高度情報化社会の中で再生される伝統文化」『國學院雑誌』平成一一年一一月号。

――、二〇〇二年「メディアの中の明治神宮」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第三六号。

――、二〇〇三年「ラジオと宗教」『平成一一年度―平成一四年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書 高

度情報化社会と宗教に関する基礎的研究』。
NHK放送文化研究所編、二〇〇二年「広がる」インターネット、しかしテレビとは大差――IT時代の生活時間調査から」『放送研究と調査』四月号。
キャントリル、H、一九八五年『火星からの侵入――パニックの社会心理学』斎藤耕二・菊池章夫訳、川島書店。
佐藤卓己、一九九二年『大衆宣伝の神話――マルクスからヒトラーへのメディア史』弘文堂。
汐見稔幸、一九八八年「子どもたちの「不思議大好き！」志向――非合理志向の調査から」日本子どもを守る会編『子どものしあわせ一一月臨時増刊号 占い・おまじないブームと子どもたち』草土文化。
志賀信夫、一九九〇年『昭和テレビ放送史』上・下、早川書房。
田崎篤郎・児島和人編著、一九九六年『マス・コミュニケーション効果研究の展開』(新版)、北樹出版。
田村貴紀、二〇〇三年「電子ネットワーク利用と宗教観、価値観、体験談交換に関する調査 解題」『平成一一年度―平成一四年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書 高度情報化社会と宗教に関する基礎的研究』。
西垣通、一九九五年『聖なるヴァーチャル・リアリティ――情報システム社会論』岩波書店。
日本放送協会編、一九八九年『ラジオ年鑑 昭和一〇年(複製版)』大空社。
浜野保樹、一九九一年『メディアの世紀――アメリカ神話の創造者たち』岩波書店。
ピカート、マックス、一九六四年『沈黙の世界』佐野利勝訳、みすず書房。
藤岡伸一郎編著・フジテレビ編成局調査部編、一九九〇年『ニューメディア'80年代史・年譜』フジテレビ編成局調査部。
マクルーハン、マーシャル、一九八七年『メディア論――人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房。
安田寿明、一九九二年「電子テクノロジーと文化変容」『思想』八一七。
柳川啓一、一九七七年「SF東大遺跡論争」『学内広報』一月二四日号、東京大学広報委員会。
Horsfield, P. G., 1984, *Religious Television: The American Experience*, Longman.